

AWAPURADIO

アワプラジオ通信

2016.10

アワプラジオ通信は千代田区社会福祉協議会（東京・九段下）の中にあるちよだボランティアセンターに置かせていただいています。また、アワプラジオやメンバーがかかわるイベント等でも配布しています。バックナンバーがウェブサイト上でダウンロードできます。置き場を提供して下さる方も随時募集しています。発送を希望される方もお気軽にご連絡ください（連絡先は裏面）。

<アワプラジオとは> 認定 NPO 法人 OurPlanet-TV で出会った仲間間で、2009 年に開局したミニFM、インターネットラジオ局です。名称は OurPlanet-TV の略称であるアワプラにちなんでいます（アワプラとは別々の団体です）。

『Abe's VIEW』 Vol. 22 「人生は思い描いたとおりにならないから面白い」

9月から仕事をする環境が変わりました。これまでは福祉系の協同組合に所属していましたが、その協同組合と関係の深い別の社会福祉法人へ移籍したのです。とはいうものの、これまでも所属先のことよりもその社会福祉法人の仕事にかかわることのほうが多く、半分以上席があったところへ席と籍がきちんとできて、毎日通う場所が変わっただけで特にガラリとやることが変わったということでもありません。

縁あって2月に広報・ファンドレイザーとして協同組合に入ったものの、関係が深く上からの公認もあるとはいえ、他法人の仕事ばかりやっている状況に居心地の悪さを感じていました。そして半年が経過する頃、退くことも視野に今後のことについて相談しようと思っていた矢先、いま所属している社会福祉法人の理事長から移籍の話があったのでした。

私が居る社会福祉法人では児童養護施設をはじめ複数の施設を運営しています。理事長から養護施設を卒園後、就職や就学でつまづいた卒園者が戻ってきて、もう一度再起をはかるための寮をつくりたいと思っている。ついてはそれを私に中心になって取り組んでほしいというのが、移籍話の趣旨でした。養護施設の子どもたちは一部の例外はあるものの、基本的に18歳になったら施設を出て行かなくてはなりません。

たとえば都内にシェアハウスを一棟買い上げるとしたら、それだけで最低1億円は必要でしょう。仮にそこまでは実現できたとしても、どう事業として成り立たせていけるのかという見通しについて、説得力をもって語れるのか等々……。思いもよらない大きな話に心が揺れました。それにプロジェクト自体には共鳴できても、誰かの手足となって動かなければいけないのなら、ちょっと嫌だなとも思いました。率直に自分の気持ちを他にもいろいろ伝えると理事長から、「阿部君の思うようにやってくれればいい。誰かに指図をされてやるような仕事ではつまらないよ」と言われました。

その言葉を意気を感じて、当面はいま目の前にある波に身をゆだねてみよう、移籍の話をお引き受けしたのでした。共感を得ながら支援の輪を広げていくことが私の使命です。今のこの状況を一年前には全く予測できませんでした。人生は思い描いたとおりにならないから面白い。つくづくそう思います。（阿部浩一）

ヨムヨム旅行記 ヴィチエンツァのオリンピコ劇場（北イタリア）



イタリアには日本よりも少し小さい国土（世界 69 位、日本は 60 位）の中に 51 か所もの世界遺産がある。北イタリアの真ん中にあるボローニャから電車で 1 時間半ほど北に行ったところの、ヴィチエンツァという小さくて静かな街にだって世界遺産があるのだ。

市街の景観とともに登録されているのが建築家、アンドレア・パッラーディオの作品群だ。四季の美を享受するため東西南北に玄関が設けられたヴィラ・ラ・ロトンダ（邸宅）や、特徴的な船底型の天井と列柱が美しいバジリカ（議会所、現在は展示場）などが主な建築物だが、なかでも彼の遺作となった世界最初の屋内劇場であるオリンピコ劇場が素晴らしい。

オリンピコ劇場は 13 世紀に建てられた城の中庭に 16 世紀になってから造られた。屋内にあるためローマのコロッセオとは違いこじんまりとしている。

正面玄関を入り天井画の美しい広間を抜け廊下を進むと、階段状の観客席の横に出た。カーブ状の壁にはそれぞれ姿の違う人体彫像が天井まで壁一面に飾られていて迫力がある。観客席は驚いたことに板張り、壁も大理石ではなく漆喰が使われているから、全体的に滑らかで温かみのある雰囲気だった。だが最も特徴的なのは客席から舞台が広く見えるよう、舞台上に設置された建物などの風景セット、さらに天井に描かれた青空の雲の構成などにも、遠近法が用いられていることだ。観客席から舞台を望むと、風景がずっと奥まで続いているように見えて立体感のある舞台セットになっていた。

さらに観客席との間に一段低くなったもうひとつの舞台があり、楽団はそこで演奏をする。音が上に向かって大きく反響するうえ観客の視界を遮らずに済むという仕組みだ。限られた空間の中でより臨場感を与えるための妥協のない執念を感じた。

ヴィチエンツァは偶然立ち寄った街だったのだが、思いがけず強い印象を受けた場所のひとつとなった。（浅香友里）

「いい猫だね」 僕が日本と世界で出会った 50 匹の猫たち

(2015 年 12 月) 岩合光昭 著 山と溪谷社 (ヤマケイ新書)・972 円



猫にブームなど来るものと思っていたが、数年前から猫ブームである。テレビで猫を見ない日がない。たくさんの猫写真を目にするが、やはりその中でも岩合さんの撮る猫が好きだ。

90～00 年代頃までの猫のカレンダーなどは、わかりやすい美猫で、いわゆるアイドル的な魅力を放つ写真の撮り方をしているものが多かった中、岩合さんの猫の写真は、味のある猫が多く、全身で何か物言っている感じがするのが大好きだ。本当に猫が大好きで、猫と仲良くなりながら撮るからこのような写真がとれるのか、と見ていて嬉しくなる。私の家の前に野良猫がいて、いつも誰かが餌をあげている。

岩合さんの撮る猫を見た次の日の朝に家の前の猫に会うと、いつもの 3 割増しでかわいく見えるのだ。猫のころを見て取るセンサーが細やかになるのだろうか。本書は、新書サイズで猫の写真と猫にまつわるエピソードが収載されていて、いつもカバンに入れて生活で殺伐としたときにしばしば開くようにしている。

この本に影響されて、家の前の猫に語り掛けるように接しているうちに、友達になれたような気がする。(大森周子)

21 世紀の共感文章術 (2016 年 9 月) 坪田知己 著 文芸社・1296 円



「21 世紀」と名前がつくのはなぜだろう？ それはインターネット時代において膨大な情報が錯綜している中で、よい文章とは何か？ を考えた結果、「最後まで読まれる文章」が最もいいという結論に達したからだ。

本書では「3 秒、30 秒、3 分の法則」を提案している。タイトルでひきつけ (3 秒)、最初の段落で興味を持たせ (30 秒)、一気に 1500 字 (3 分) ほど読んでもらうこと。タイトルと書きだしの 200 字に徹底的にこだわるのが、最後まで読まれる文章を作るうえで必要不可欠なのである。

読まれる文章には読者の共感を呼ぶことが重要である。本書では「ラブレターを書くこと」を推奨している。

ラブレターを書くことは相手を想定し、なぜ好きなのかを書く行為。ラブレターは相手に好きになってもらわなければ意味がない。文章も一緒に、読者に理解してもらい、共感してもらえなければ無価値となる。

本を読み終わって改めて考えてみると、自分の思いは積極的に発信するが、その対象である読者が不在であったことに気づく。これは書くことに限らない。目の前に人がいるのにも関わらず、相手の気持ちを考えずに話していないか。本書には人と接するうえで最も重要なことが書かれている。

「あなたは今、誰のことを思って話していますか (書いていますか) ?」

この問いに答えることができれば、いいメッセージを相手に届けることができているに違いない。21 世紀においてはメッセージの質が問われるのである。(平川凌兵)

ミニカーからすべてを学んだ (2004 年 2 月) 森永卓郎 著 エイ出版社・1512 円



有名なトミカという日本製ミニカーは 1970 年に誕生した。筆者も幼少の頃に買い与えられ、小学 3 年～6 年にかけていちばん夢中になって集めた。当時はトミカ誕生からすでに 10 年以上が経過していて、すでに初期の発売モデルをはじめとする絶版品は入手が困難になり始めていた。そんな絶版トミカを古びた玩具店のデッドストックを求めて訪ね歩き、せっせと集めた 200 台。ガラス職人だった叔父にプレゼントされたガラスのコレクションケースに収納して、飽きもせず四六時中眺めていた。

そんなトミカとの蜜月時代もいつしか音楽など別の興味関心を取って代われ、収納スペースや管理の問題もあって、それらのコレクションはいま欲しい人の手元に渡るべきだと、専門店に売却してしまった。それでも折々にはトミカのことには気になったし、時々古びた玩具店で掘り出し物に出会って歓喜の声をあげる自分の夢を見たりした。

いささか自分語りが増えてしまったが、本書は経済評論家としてテレビなどでもおなじみの著者によるミニカーコレクションの本である。2004 年と少々古い本だが、偶然手にした本書によって、筆者の「ミニカー魂」に火がついてしまった。著者はトミカに限らず、世界中のミニカーを収集している。国や時代によるミニカーの出来栄の違いや技術力などを指摘するくだりは、経済評論家ならではだが、著者曰くコレクションのほんの一部だという数々のミニカーの写真が楽しい。

100 万円のミニカーを買おうとしていた時期、著者は 8 年落ちのカローラに乗っていたそうだ。ミニカーに 100 万円。いま専門店へ行くと、かつて私が古びた玩具店で当時の定価 320 円、もしくはそれ以下で手に入れたものと同じミニカーにとんでもない値段がついていたりする。このことをきちんと説明するとしたら、まさに経済学の領域であろう。(阿部浩一)